9月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　9月3日

今日の市は高崎製品市場とバッティングしていた。 買い方は丸太の入札を早々に済ませると
みな高崎の製品市場へ向かい、丸太の市場は入札結果発表の頃には一人も残っていない。
久々に入札結果発表は無しになったので、入札結果のコピーを貰い、不落札になった物件の
情報を取材した。 不落札物件の情報は結果発表の折に口頭で 「〇〇円で不落札です。」
と言うだけなので、結果発表が無いと表に現れない。
結果発表時に 「〇〇円で不落札です。」 と言うと 「ではあと〇〇円出そう。」と声が掛かり
不落札から落札できるチャンスがあるからであり、また　売る側の　”ボーダーラインも暗に主張
出来る狙いがある。その辺りが いわゆる駆け引きで、売りに出るか？或いはにべもなく突き放すか？
と言うやり取りになる。 買い方も”今の時期に札が入った物を不落札にするのは得策では無い”
事は良く知っている。その上で入札価格を決めて来る。売る方も少しでも早く売りたいのだが
どこかで線を引いて、やむなく不落札を出さなければならない。 毎回の明細書に赤字で
書き込んである不落札物件には、こういった背景がある。

市の内容を見てみると、相変わらず消え入りそうな市である。
前回の結果を見てみると、スギの3.0m材は完全に姿を消したと言っても良い様な状態だ。
スギは4.0m材はかろうじて動いている様に見えるとは言え、いかにしても量が少ない
今回はどうか、今回も1.3㎥　曲がり材で　11本に過ぎない。価格も1番札と2番札の差が無く
応札枚数も　2～3枚なので、当分は売れる事は無いであろう。

スギの4.0mはどうかと言えば、在庫処分的な物件が多く、相場とは言えない状態である。
太物丸太の売れ行きも”エクステリア用”などの用途の1枚札の落札が多く、価格もジリ貧状態だ。

対してヒノキは良く動いている。 とは言ってもいかにしても量が少ないので見通しは付きかねるが
何とか持ち応えたと言った結果だろう。
以前も触れたが、高値で売れた物は忘れても良い。 注目すべきは売れ残った物件である。
好調に見えるヒノキと言えども、不落札物件は有る。 今回の入札番号2号などは、太さ･量
共に人気が有る寸法である。 これは不落札どころか無入札である。誰も見もしなかった事になる。

前橋の市場は材の瑕疵については細かく表示している。この2号には瑕疵の表示はない。

しかし買い方の目は誰一人この材を信用しなかったのだろう。やはり夏場の材の売り方の難しさだ。
この時期に品質の不安定な丸太を買うよりも、出来上がっていて乾燥も終わり、瑕疵材は取り除い
てある製材品の市場の方に関心が寄るのも、当然であろう。スギの柱が50,000円/㎥になったそうだ。
20年前の価格だ。 ここから運賃･電気代･人件費･機械損料･歩留りを計算すれば、丸太は、
立つ瀬が無くなる。

調査日　素材生産協同組合　9月8日

今日の市は素生協の市場の開設47周年記念市という事で、午前中は式典があった。
式典の方は、来賓・受賞者が参列したが、来賓は代理の方が祝辞を預かって来て朗読
する事で形は整うが、受賞者は出荷者・買い方共に欠席が多く、式典が終わってみれば
賞状や感謝状とそれを入れる額と記念品が、沢山積み上げられていた。
こちらの開設記念市の式次第には、かつて式典の後に祝宴もあった。 ブロックを積んで
大きな炉を作り、炭火の周りを取り囲んで生垣のごとく串を打った鮎が焼かれて、大勢の人が
舌鼓を打ちながら、買い方・売り方・県の担当者・国有林の担当者などがそれぞれの立場で
木材談議に花を咲かせたものだった。
出荷材も、市場の方でこの日に合わせて目玉になるような物を取っておいて賑々しく椪べると
その周りにまた人の輪が出来て、その丸太について話が膨らんだ。
良い丸太を見れば、そこにいる皆が”ワクワク”するような時代であった。

今日　記念市に並べられている丸太も、皆がワクワクした時代には既に生を受けて
皆の目を引くような優良材になるべく成長をしていた木達である。
成長を遂げていざ市場に並んでみたら、こんなにも様変わりしているとは思いもよらなかった事だろう。

市の方は、国有林からスギの3.0m・4.0mの中目材が多く出品されている。4.0mの30㎝上材も
出ているが、一定量の山から生産されるとなれば自然の配分だろう。 決まった林分の収穫をほぼ
そのまま持ってきている事が判る。
価格は値下がり傾向が出る前の水準を維持した価格だが、3.0mについては今まで隣接する
加工協同組合が買っていた寸面であるが、今日は親会社の”トーセン製材”が落札している。
いずれにしても札を入れるのは同じ買い方が”加工協同組合”と”トーセン製材”を使い分けて
いるのだが、加工協同組合の工場の方はこの寸法の丸太が入りすぎて満杯の状態だそうだ。
そこで買うとすれば親会社が買う事になる訳だ。価格の維持もできる。

買い方も安ければ安いほど良いなどとは思っていない。製品価格が50,000円/㎥を割り込むような
事態とは裏腹に、住宅価格は上がっている。 いまや百万円/坪は当たり前になっている様である。
木材以外の建設資材がドンドン値上がりする中で、木材だけがその分下押しされている。
今や製品市場は20年前と同じくらいのレベルに低迷していると言うが、50,000円/㎥の内訳として
運賃・人件費・電気代・機械損料などは、木材業界に限らず軒並み値上がりしている。
原木価格にしわ寄せを持って来ざるを得ない状況だが、原木価格が下がりすぎれば、国産材の
供給もされなくなる。さりとて輸入材が安かったのは昔の事、今や2×4材などは輸出すらされている。
輸入材が高い一方で、国産材が市場に出て来なくなっては買い方も立ち行かなくなる。
だから　原木生産が維持できる価格で買い支えなければならない訳である。